

令和 2 年 6 月 15 日現在

機関番号：12501

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2017～2019

課題番号：17K01890

研究課題名(和文) 幼児初期の移動的・平衡的運動の形成過程における保育環境と指導方法の解明

研究課題名(英文) The roles of childcare environments and instruction methods in the process of formation of locomotive and balanced movement patterns in toddlerhood

研究代表者

松崎 洋子 (MATSUZAKI, Yoko)

千葉大学・教育学部・教授

研究者番号：90331511

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,500,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、幼児初期にあたる1,2歳児の移動的動作・平衡的動作の発達と保育環境や内容、指導方法との関連を明らかにすることを目的とした。保育所での身体活動量と基本動作、保育環境・指導方法を調査した。

その結果、幼児初期においても歩数や中・強度活動時間(MVPA)など身体活動量の性差・個人差が出現する傾向がみられた。基本動作習得においても差がみられ、平衡系動作は軽強度活動時間(LPA)と関連していた。保育内容や方法は、基本動作の獲得に影響を与えていることが明らかになった。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究は、幼児初期の子どもの基本動作獲得と保育環境、指導方法の関連に着目し、発達を促す保育を明らかにした。幼児初期の幼児が多様な身体活動を経験できるようにバランスを取る動作を含む保育内容や待ち時間が少ない活動など、保育者が工夫することが必要であることが示唆された。これらの結果は、幼児の運動発達を促すための保育カリキュラムの開発に寄与すると考えられる。

研究成果の概要(英文)：The purpose of this study was to clarify the roles of childcare environments and instruction methods in the process of formation of locomotive and balanced movement patterns in toddlerhood. Through the observational research in six nursery schools, we found out that sex and individual differences of the physical activity appeared at walking steps and time spent in moderate to vigorous physical activity (MVPA) even in toddlerhood. Individual differences also appeared in the fundamental movement acquisition, and the link between the balanced movement and time spent in light physical activity (LPA) was observed. It indicates that childcare contents and the methods have an effect on children's acquisition of the fundamental movement. Through this research, it was suggested that the childminders require to contrive the physical activity. These research results would contribute to evolve childcare curriculum to promote toddler's motor development.

研究分野：幼児教育

キーワード：幼児初期 身体活動 身体活動量 基本動作 保育環境 保育内容 指導方法

## 様式 C-19、F-19-1、Z-19（共通）

### 1. 研究開始当初の背景

文部科学省の調査(2016)によると、1980年代半ば以降、幼児の体力・運動能力の低下がみられ、現在も低い水準のまま推移している。そのため幼児期の特性を踏まえ、「楽しく体を動かす遊びを中心に毎日最低60分以上体を動かすことが望ましい」とする「幼児期運動指針」(2012)が文部科学省により策定された。それ以来、幼児の動きや身体能力に関心が高くなり、身体の動きの発達過程や、身体能力の発達、身体活動量、体力づくり活動の効用などの多くの研究がある。

我々はこれまで4、5歳児を対象に組織的な運動遊びへの取り組みの効果を検証したところ取り組みない幼児よりも身体能力が高く、身体能力の個人差が大きいことを見出した。また保育中の活動場面による身体活動量を比較したところ、好きな遊びに取り組む場面では活動水準の個人差が大きい。鬼ごっこ等の総合的運動遊びに取り組んだ場合は幼児の日頃の行動特性が活発か不活発かに関わらず、どの幼児も高い身体活動水準を示すことが明らかになった。しかし4、5歳児において既に身体能力や身体活動量の個人差があることから、それまでの運動経験や環境等の差異が身体能力の発達や活動量に影響すると予想される。

しかし、幼児初期(1、2歳児)を対象とした研究は、2歳児の活動量を測定した研究はあるものの、日常の保育場面における運動発達過程を実証的に検討し、幼児の運動発達と関連する要因についての研究は見当たらない。幼児初期の運動経験は保育環境や保育者の指導方法の影響が大きいと予想されることから、幼児初期に著しく発達する移動的・平衡的運動の発達過程と、保育環境、指導方法との関連を解明する必要性を感じ、本研究を実施した。

歩行開始以降、2歳頃には走る、2歳半頃には両足で跳ぶことができるようになり、幼児初期の1、2歳は自律的な移動的運動や身体のバランスを取る平衡的運動など粗大運動が急激に発達する時期である。Thelen(1989)は、運動発達を自己組織化現象としてとらえ、姿勢、筋力・脂肪組織の成長勾配、環境状況などを検討して複合的に相互作用することで全体性を持ったさまざまな運動パターンや発達の現象が生じることを実証的に示した。1歳未満児の動きの発達過程については、歩行獲得や、寝返り動作獲得、つかまり歩きなどが明らかになっているが、歩行開始後は、動きの発達などの研究があるのみで、幼児初期の移動的・平衡的運動を検討した研究は殆どない。

現在、1、2歳児の保育所等利用数は急激に増加しており、小規模保育所や認可外保育施設等で保育される幼児も多い。また施設によって園内環境や園外環境の差が大きいことがわかっている(淀川・高橋,2016)。アメリカの身体活動ガイドライン(2009)では、幼児初期(1、2歳児)に「室内と戸外の両方で組織的活動(30分以上)と非組織的な活動(60分以上)をする」ことが推奨されており、カナダのガイドライン(2012)では、「180分以上身体を動かす活動に取り組む」としている。しかし、日本では幼児初期の運動発達と保育環境との関連は実証的な検討がされておらず、まだ幼児初期のガイドラインはない。

そこで本研究は、歩行開始後の幼児初期の移動的運動と平衡的運動の発達過程の実態と関連すると予想される保育環境や内容、指導方法の実態を検討する。

### 2. 研究の目的

本研究の目的は、幼児初期にあたる1、2歳の移動的運動と平衡的運動の発達過程を保育環境や内容、指導方法の観点からの検討を通して、幼児初期の運動経験への影響が大きいと考えられる保育環境や指導方法と運動発達との関連を明らかにする。それにより幼児初期の運動発達を促進するために必要十分な保育の環境や、内容、指導方法を提唱する。

### 3. 研究の方法

本研究では、1、2歳の運動発達と保育環境や内容、指導方法の関連を明らかにするために、1、2歳児の運動発達に特徴的である移動的運動と平衡的運動を取り上げ、チェックリスト、保育観察、身体活動量の測定、さらに保育者に質問紙およびヒアリング調査を実施した。

#### (1) 幼児初期の運動発達に関する文献研究

1～2歳の移動的運動及び並行的運動を中心とした運動発達に関する個別調査記録の案を作成するために、発達検査、運動検査、保育環境等について文献調査を行った。

#### (2) 幼児初期の幼児の身体活動量

前後、上下、左右の3次元の動きと活動強度をとらえることのできる加速度計は、移動的・平衡的運動の詳細な動きを量的にとらえることに適しているため、1、2歳児を対象として身体活動量測定に加速度計を用いて保育中の行動の調査を実施した。

#### (3) 幼児初期の移動的・平衡的運動の運動発達調査

幼児の運動発達の実態を、先行研究を参考に作成した基本動作項目を用いて調査した。

#### (4) 園の幼児初期の保育環境と指導方法の調査

保育施設の広さ・位置、園庭環境、保育室内環境、保育内容、指導方法、保育者の配慮等の実態把握を観察、及び、聞き取りによって調査した。

(1)～(4)までの調査・分析により、幼児初期の運動を、量的質的の側面から検討するとともに、園の環境や保育指導方法の違いに着目して検討した。これらの調査から身体全体を用いた動きの経験をとらえて詳細に分析し、保育環境や指導法との関連を検討することにより、より良い環境や指導法の提案を行う。

4. 研究成果

(1) 幼児初期の基本動作項目調査表の作成と実施

日本版デンバーⅡ発達スクリーニング検査、遠城寺式乳幼児分析的発達検査等の文献を参考に、運動発達の1～2歳の移動的運動及び平衡的運動を、移動動作、平衡動作、操作動作の3つのカテゴリに分けて、基本動作項目の個別調査記録表(表1)を作成した。

表1 基本動作項目

項目		概要	
移動	1	両足跳び1	バラバラ
		両足跳び2	同時
	2	階段上る1	はって上る
		階段上る2	片手を手すり
		階段上る3	足を交互に
	3	階段下りる1	手を持って
		階段下りる2	片手を手すり
		階段下りる3	足を交互に
4	後ずさり歩き		
5	片足跳び		
6	台より飛び降りる		
7	つま先で歩く		
8	幅跳び		
平衡	1	片足立ち1	片側
		片足立ち2	両側
	2	つま先立ち	
	3	ぐるっと回る1	片側
		ぐるっと回る2	両側
	4	ぶら下がる	
5	台をまたぐ		
6	わたる		
操作	1	ける	
	2	投げる	
	3	捕る1	転がったボールを止める
		捕る2	転がったボールを捕る
4	転がす		

(2) 幼児初期の幼児の身体活動量

平成29年度、30年度は関東圏の園庭の広さが異なる保育所3園、令和元年度は1園の0～2歳児の幼児を対象に、保育中の身体活動量の測定を実施した。デイリープログラムは全ての園でほぼ同じであった(表2)。

2歳児クラスの幼児16名(男児4名, 女児12名; 平均年齢3.50歳)を対象に、保育中(昼食、午睡を除く)の8日間の身体活動量を測定した。保育時間中(9時～11時と14時30分～16時30分)の平均歩数は男児が3,613±987歩、女児が3,138±609歩であった。園内・園外に関わらず午前中の主活動での歩数が多く、中・高強度活動時間が長かった(図1)。中・高強度活動時間は男児が36.1±11.6分、女児が25.3±5.3分であった先行研究の4・5歳児(石沢ら, 2014)と比較して、幼児初期の子どもは身体活動量が少ない傾向がみられた。歩数では有意な性差がみられなかったが、中・高強度活動時間では、女児よりも男児の方が有意に高く、2歳児クラスの幼児においても性差が認められた。

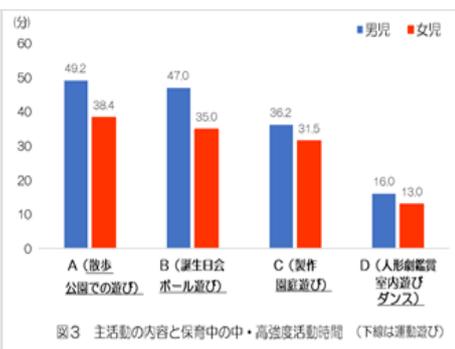
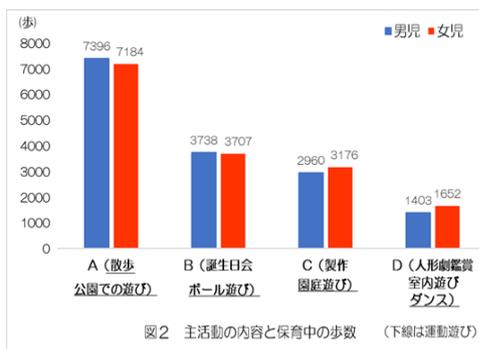
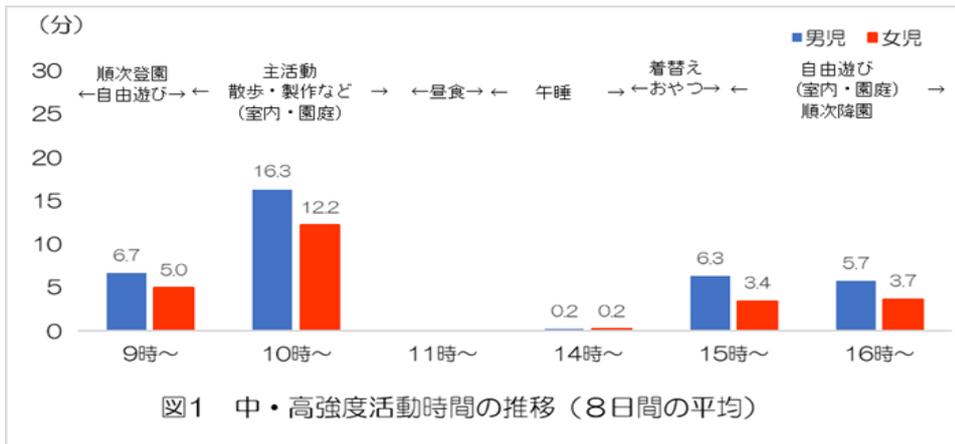
主活動の内容が異なる4日間の身体活動量を比較したところ、公園に出かけた日(A)は移動距離が長く、平均歩数は7,000歩を超えており、園内での活動日(B・C・D)のほぼ倍以上であった(図2)。

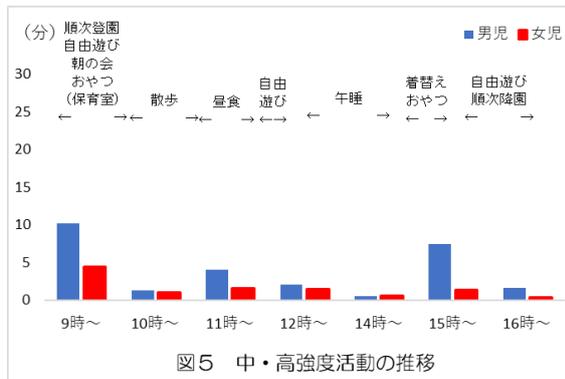
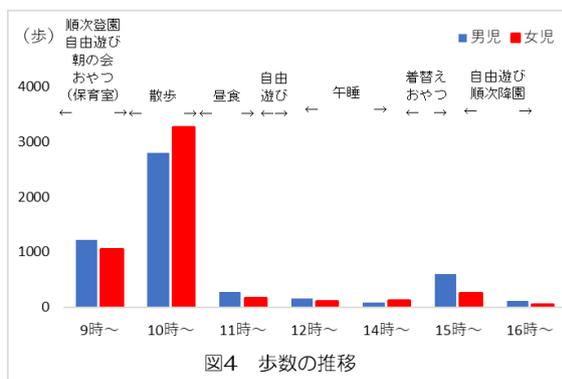
中・高強度活動時間をみると、公園に出かけた(A)とテラスでのボール遊び(B)ではいずれも高い値を示していた(図3)。

同様の傾向は、1歳児クラスの活動と在籍児9名(1.92～2.83歳, 平均2.39歳)の身体活動量でもみられた。一日の中で園内外に関わらず午前中の主活動の歩数が多く、中・高強度活動時間が長かった。しかし、1歳児の散歩活動では、歩数は多いが(図4)、中・高強度活動時間は少なかった(図5)ことから、中・高強度活動量を確保するためには、単に散歩しているだけでは十分とはいえないことが明らかとなった。

表2 デイリープログラム

時間	子どもの活動
7:00	開門(早朝保育)
8:30	登園 朝の集まり あそび 片付け
9:00	おやつ 挨拶をする
10:00	室内・戸外遊び
10:40	片付け 排泄・着替え
11:00	昼食
12:30	午睡準備 排泄・着替え
13:00	午睡
15:00	起床 排泄・着替え
15:15	おやつ
16:00	降園準備 自由遊び
17:00	片付け・降園
18:00	延長保育
19:30	閉門





また、1日の平均歩数、中・高強度活動時間の平均も男児が女児よりも長く、男児の方が活発に活動している傾向がみられたことから、1歳児においてもすでに性差や個人差が出現している可能性が示唆された。

さらに平成30年度に活動量測定を行った0、1歳児クラスの子どものうち、1年後の令和元年度にも測定が可能であった1、2歳児クラスの子ども（計30名）を対象に、保育中の活動量測定を行った。その結果、前年度に比べて中・高強度活動時間はそれぞれ増加する傾向がみられ、運動発達に伴い活発な活動ができるようになったことが影響していることが伺えた。

### (3) 幼児初期の移動的・平衡的運動の基本動作と身体活動量

園庭面積の異なる保育所2園の2歳児（1歳児クラス）を対象とした。各園の人数及び平均月齢はA園16名/30.7か月、B園16名/28.8か月であった。

表1の各項目の評定を平均して、それぞれの動作得点(SD)を(3点満点)算出したところ、平衡系動作は1.8(0.47)、移動系動作1.9(0.53)、操作系動作は2.7(0.32)であり、全動作平均は2.1(0.37)だった(表3)。また、各動作得点間の相関を検討したところ、平衡系動作得点と移動系動作得点に強い相関(|r|=0.722)、平衡系動作得点と操作系動作間に弱い相関(|r|=0.25)が出現した。

一方、歩数および強度別活動時間の身体活動量と基本的動作得点との関連を検討したところ、軽強度活動時間(LPA)と平衡系動作得点の間に中程度の相関(|r|=0.45)(図6)、全動作得点との間に弱い相関(|r|=0.304)がみられた。また歩数は平衡動作(|r|=0.29)、操作系動作(|r|=0.249)、全動作(|r|=0.277)との間に弱い相関がみられた。しかし、中・高強度活動時間(MVPA)は、いずれの基本動作得点との間にも有意な相関はなかった。

3種類の基本動作は関連していたことから、特定の基本動作を習得してから他の動作が獲得するのではなく、様々な動作を並行して経験しながら習得していると考えられる。幼児初期では、激しい動きの活動や集団での遊びの頻度が少ないため、中・高強度活動時間(MVPA)ではなく軽強度活動時間(LPA)が、基本動作と関連した可能性がある。

表3 各基本動作得点の平均(SD)

	平衡系動作	移動系動作	操作系動作	全動作
A園	2.0(0.52)	2.1(0.64)	2.8(0.43)	2.3(0.43)
B園	1.6(0.28)	1.6(0.20)	2.6(0.13)	1.9(0.16)
全体	1.8(0.47)	1.9(0.53)	2.7(0.32)	2.1(0.37)

\*\* p<.01

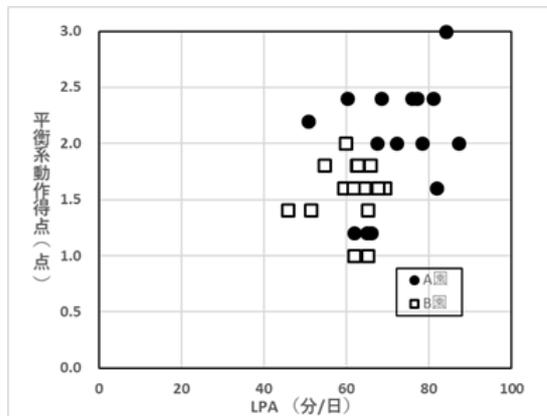


図6 平衡系動作とLPAの関連

### (4) 幼児初期の移動的・平衡的運動の基本動作の発達と園の保育環境と指導方法の関連

2園を対象に、1歳児26名、2歳児33名の子どもの基本動作の獲得実態を調査し、動作獲得の発達と保育者が主観的に評価した子どもの活発さとの関連を検討した。その結果、保育者は1歳児クラスよりも2歳児クラスの子どもの方が活発であり、同年齢でも高月齢の子どもの方が活発であると評価していた。2歳になっていた子どものほぼ全員が18項目中6項目を「できる」「概ねできる」と評定しており、園によって子どもの運動発達には差がないことが示唆された。

次に、保育所3園の1歳児55名を対象に基本動作の習得について3園で調査し、保育中の子どもの様子を観察したところ、施設面積、園庭の広さや保育室の配置によって、動作の発達状況の違いは見られなかった。

「跳ぶ」「上る」「下りる」「またぐ」のように、日常生活の中で行う特別な装置や遊具が必要でない動作は殆どの子どもが習得していたものの、その動作は「はって上る」「手すりをもって下りる」など初歩的な段階であった。「階段を下りる(足を交互に)」「片足跳び」のように体

全体を使った複合的な動作は1歳児低月齢では多くの子どもが習得できておらず、月齢が高くなると習得した子どもが多くなっていたことから、この時期に初歩的な段階の動作から複合的な段階の動作へと発達していることが見いだされた。

一方、「したことがない」と評定された項目では園による差がみられた。これには敷地面積や園庭面積、園舎の構造などの物理的環境が影響した可能性はある。しかし、2階の保育室から数人ずつ支度が出来た子どもから階段を下りて園庭に出るなどの工夫をしていた園では、「したことがない」項目が少なかった。幼児初期の子どもにおいても発達の状況に合わせた動きが遊びの中でできる環境を設定して子ども自身が意欲的に体を動かし、様々な動作を習得している姿が見られた。その一方、園庭に面して保育室がありすぐに園庭に出ることが可能であるが一人や小グループではなくクラス全員の支度ができてから一斉に園庭に出ている園では、「したことがない」項目が多かった。幼児初期の子どもは、着替えや排泄などをするときに援助が必要であるため、保育者が個別に対応していた。一斉に活動する保育では個々に活動する形態の保育よりも子どもが待つ時間が長くなり、体を動かす実動時間が短くなった可能性がある。保育内容や方針によって身体活動経験が異なることが、「できない」「したことがない」と評価した項目数に差が見られた一因であると考えられる。

#### (5) 幼児初期の子どもの運動発達を促進するための保育環境、内容、指導方法

本研究では、幼児初期（1、2歳児）の運動発達を促すために必要な保育環境と指導方法を解明し、幼児期に楽しみながら身体を動かす様々な活動につながるための保育環境・保育方法の提案を行うことを目的とした。

幼児初期の子どもにおいても、幼児と同様、歩数や中・強度活動時間など身体活動量の性差・個人差がすでに出現しており、基本動作の発達状況においても差がみられた。

運動発達を促進するためには、もちろん保育室や園庭の環境の整備が必要であるが、それだけで十分とは言えなかった。他クラスと時間や場所などを調整して、ほぼ毎日戸外に出る機会を作るなど、保育内容や指導方法によって、基本動作項目の習得状況や身体活動量が異なる傾向がみられた。

身体活動量と基本的動作の習得状況を検討したところ、以下のことが見いだされた。

- ①本研究の対象園においては、保育中の身体活動量はWHOによる一日あたりの推奨値の約半分であったことから、園と家庭の両方で活動量の確保に努める必要がある。
- ②基本動作得点は動作の種類により異なった。平衡系動作と移動系動作に相関がみられたことから、この2つの動作の習得は関連している可能性がある。
- ③身体活動量と基本動作にはいずれも園差がみられ、保育内容や保育方法などの影響を受けている可能性が伺えた。幼児初期の子どもは、着替えや排泄などをするときに保育者の援助が必要であるため、個別に対応する。そのため、3歳以上児クラスと同様に一斉形態での活動では、子どもの待つ時間が長くなってしまい、体を動かす実動時間が少ない傾向が見られた。
- ④保育内容と身体活動量の関連をみると、散歩と公園での遊びを行った日は保育室やテラスでの活動を行った日よりも歩数および軽強度活動時間の値が有意に高い傾向がみられた。一方、中・高強度活動時間には大きな差がみられず、室内の活動でも環境設定や保育者の関わりなどの工夫により、中・高強度活動時間の確保に繋がる可能性があることが示唆された。幼児初期では子ども自身で活動を選択することは難しいため、保育者は子どもたちが遊びの中で必要な運動量を確保するとともに、多様な動作を十分に経験できるような環境づくりや活動を積極的に行うための工夫が求められる。
- ⑤軽強度活動時間と平衡系動作得点との間に中程度の相関、歩数と動作得点の間に弱い相関があり、身体活動量と動作得点に関連があることが伺えた。乳幼児期は神経系の発達が顕著な時期でもあるため、特にバランスを取る動作ができる機会を意識的に取り入れることが望ましい。

本研究の結果から、幼児初期の保育では、3歳以上児とは異なる環境構成や保育内容、保育者の配慮等の保育方法が必要であることが明らかになった。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計2件（うち査読付論文 2件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 1件）

1. 著者名 石沢 順子、佐々木 玲子、松崎 洋子	4. 巻 5
2. 論文標題 低年齢児における身体活動量の測定：機種による比較	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 白百合女子大学初等教育学科紀要	6. 最初と最後の頁 1 - 8
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 石沢 順子、佐々木 玲子、松崎 洋子、吉武 裕	4. 巻 16
2. 論文標題 幼児の身体活動に関する客観的評価と保護者および保育者による主観的評価との関係	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 生涯スポーツ学研究	6. 最初と最後の頁 13 - 22
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計16件（うち招待講演 0件/うち国際学会 3件）

1. 発表者名 石沢順子，松崎洋子，無藤隆
2. 発表標題 2歳児クラスの子どもの身体活動量
3. 学会等名 日本保育学会第71回大会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 Ishizawa, J. ,Sasaki, R., Yoshitake,Y.
2. 発表標題 Time spent in physical activity by preschool children- Comparison across one year -
3. 学会等名 23rd Annual Congress of the European College of Sport Science (国際学会)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 石沢順子, 佐々木玲子, 吉武裕
2. 発表標題 幼児の身体活動量と家族の運動習慣・意識との関連
3. 学会等名 第73回日本体力医学会大会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 石沢順子, 佐々木玲子
2. 発表標題 年少の幼児における日常身体活動量の経年変化 - 2歳~3歳児クラスの追跡測定から -
3. 学会等名 第15回子ども学術会議
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 松崎洋子, 無藤隆
2. 発表標題 幼児初期の運動発達と活発さとの関連
3. 学会等名 日本発達心理学会 第30回大会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 松崎洋子, 石沢順子, 無藤隆
2. 発表標題 幼児初期の子どもの保育内容による身体活動量の違い
3. 学会等名 日本保育学会第72回大会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 石沢順子、松寄洋子、無藤隆
2. 発表標題 保育園における活動内容と身体活動量の検討
3. 学会等名 日本保育学会第70回大会
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 Ishizawa, J. ,Sasaki, R., Yoshitake,Y.
2. 発表標題 The time spent on physical activity by preschool children on weekends-Comparison between active and inactive children-
3. 学会等名 22nd Annual Congress of the European College of Sport Science (国際学会)
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 石沢順子、佐々木玲子、吉武裕
2. 発表標題 身体活動量からみた親子の活動パターンについて
3. 学会等名 日本体育学会第68回大会
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 石沢順子、佐々木玲子
2. 発表標題 運動・スポーツ系の習いごとと幼児の日常身体活動量の関係
3. 学会等名 第14回子ども学術会議
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 石沢順子、松寄洋子、無藤隆
2. 発表標題 2歳児クラスの子どもの身体活動量
3. 学会等名 日本保育学会第71回大会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 松寄 洋子
2. 発表標題 幼児初期の子どもの身体活動量と保育活動との関連
3. 学会等名 日本発達心理学会第30回大会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 松寄 洋子
2. 発表標題 幼児初期の子どもの基本動作発達と保育環境～3保育所の比較～
3. 学会等名 日本乳幼児教育学会第29回大会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 石沢 順子、佐々木 玲子
2. 発表標題 幼児前期の子どもの保育中の身体活動量
3. 学会等名 第16回子ども学術会議
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Ishizawa, J. ,Sasaki, R.
2. 発表標題 Relationship between preschool children's physical activity level, their family's exercise habit and awareness
3. 学会等名 24th Annual Congress of the European College of Sport Science ( 国際学会 )
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 石沢 順子, 佐々木 玲子
2. 発表標題 幼児前期の子どもの日常身体活動量
3. 学会等名 日本体育学会第70回大会
4. 発表年 2019年

〔図書〕 計6件

1. 著者名 吉田 伊津美、砂上 史子、松崎 洋子、杉本 信、鈴木 康弘、渡辺 佳子、堤 ちはる、石沢 順子、竹内 範子	4. 発行年 2018年
2. 出版社 光生館	5. 総ページ数 192
3. 書名 保育内容 健康	

1. 著者名 無藤 隆、大豆生田啓友、松崎洋子 ほか	4. 発行年 2018年
2. 出版社 ひかりのくに	5. 総ページ数 128
3. 書名 10の姿プラス5・実践解説書	

1. 著者名 無藤 隆、松寄洋子 ほか	4. 発行年 2018年
2. 出版社 ぎょうせい	5. 総ページ数 246
3. 書名 育てたい子どもの姿とこれからの保育	

1. 著者名 無藤 隆	4. 発行年 2017年
2. 出版社 図書文化社	5. 総ページ数 272
3. 書名 新しい教育課程におけるアクティブな学びと教師力・学校力	

1. 著者名 無藤 隆	4. 発行年 2017年
2. 出版社 チャイルド本社	5. 総ページ数 71
3. 書名 法令改訂(定)の要点とこれからの保育	

1. 著者名 神長 美津子、岩立 京子、岡上 直子、結城 幸治、松寄 洋子他	4. 発行年 2019年
2. 出版社 光生館	5. 総ページ数 212
3. 書名 幼児理解の理論と方法	

〔産業財産権〕

〔その他〕

千葉大学教育学部 松寄洋子Lab  
<http://www.e.chiba-u.jp/~matsu/index.html>

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	無藤 隆  (MUTO Takashi)  (40111562)	白梅学園大学・子ども学研究科・教授(特任)   (32808)	
研究分担者	石沢 順子  (ISHIZAWA Junko)  (40310445)	白百合女子大学・人間総合学部・准教授   (32627)	